自由南アフリカの声
Voice of Free South Africa

2000年1月
No.22

発行　／　アジア・アフリカと共に歩む会
Published by Together with Africa and Asia Association (TAAA)

1999年12月の報告と予定

■10月に南ア出版書籍購入費をダーバンとベノニへ送金
■10月に日本からの本配布スタッフ人件費をダーバンに送金
■11月に南ア国内の本の輸送費をマシフンディスに送金
■12月にダーバンへ3,851冊送付。総計16万4,282冊
■1月にユネスコの菊川氏帰国、TAAAと会議
■2月にTAAAから南ア訪問

目次

日本からの本を使った読書指導…2
マシフンディスからの手紙……3
移動学校図書館　その2……4
「アパルトヘイト終焉から5年」
　記事の訳文……6
　Asahi Evening News　記事……7
　講演「南アの現状と未来」…8

読書コーナーで読む本を探す　クワズールナタール

日本からの本を使った読書指導

―南ア教師ノンランラ・マンケラ先生からのレポート―

イナンダ・グレベ第17小学校（クワズールーナタール州）学校図書館推進プロジェクト

学校図書館推進プロジェクトは大変すばらしいものです。それは、教える者と学ぶ者が共に図書館を利用し合い、また生徒に読書する事を促しながら、教える者と学ぶ者双方に自然に知識を増やしながら本好きにするという理由で大変すばらしいことなのです。最初のうちこのプロジェクトは初期段階では我々に合わないようにも見えました。しかし教師である私は生徒に適応するように工夫しました。私たちの生徒は今では、英語で、物語を読み、教師からのちょっとした手助けで英語で文章をきちんと言えるようになり、果ては正しい方法で図書館で本を探し、正確にもとの所に戻すということもできるようになったのです。

子供たちと本を読むマンケラ先生
「ワーッ、分かったのね。うれしいわ」

今では私は、自信を持って、英語で彼らに物語を読み聞かせることができるようになり、生徒はそれをズールー語に訳す事なく理解し、読み聞かせた後の質問に答えられるようになったのです。

私の生徒たちは今や、物語や読んだものに基づく質問をしたりそれに答えたり、私の小さな助けで情景を説明したりできるのです。このプロジェクトがすばらしいので私たちは他の学校にこの事を知らせ、私がイナンダ地区ファシリテイターになった時、彼らを研修しようと決め、イナンダのいくつかの学校に話しました。今の所、正式に討議せずに私はイナンダの12の学校にプロジェクトを導入しただけですが、私たちは、"７月の冬休み"に図書館についての研修会を行う予定です。

プロジェクトが２段階目になってくると、ジュリア・レイノルズとシボンギレ・ルワカ（註：ELETのスタッフ）は基礎段階を組分けするというアイデアをくれるなどのすばらしい補助をしてくれました。ジュリアとシボンギレのアイデアは私たちを天まで引き上げてくれたと私は思っています。というのは、今や私たちの生徒たちは読書を楽しむようになり、新聞や雑誌や教室に掲示されているものまで読み、とにかく読むことに熱心になっているのです。

実にこのプロジェクトはすばらしいものです。本はまだまだ欲しいです。そして私はすべての人がこのプロジェクトを真摯に取り上げ、若い人たちがこの最善のことをすることを望みます。

私たちはまだ図書室は持っていないけれど、ライブラリーコーナーや学級文庫をもっています。生徒たちは今や彼らが読んだ物について書いたり、コメントしたりできるようになりました。

解説：ELET（English Language Educational Trust）は南ア国内に広く、英語を使用した授業の改革を推進しているダーバンのＮＧＯです。読書運動も行っています。そこではTAAAが送った英語の本数万冊も使われています。　　（解説と訳　野田千香子）

ケープタウンのＮＧＯ

マシフンディスからの手紙

マシフンディス コーディネーター
マドダ・クフェ

アジア・アフリカと共に歩む会（ＴＡＡＡ）から受け取った本についての報告をします。

私たちは1997年からたくさんの本を受け取ってきました。これらの本は学校で使うのに、大変質も良く、利用価値も高いものです。私たちは、本を受け取ると、レベルによって仕分けし、記録します。それからそれらを恵まれない地域の学校へ分配します。そうした地域の学校の多くは空っぽの図書室があるか、または図書室そのものがないかです。授業スペースの不足から図書室を教室に変えてしまったところもあります。そんなわけでそれらの本は大歓迎され、感謝されています。わたしたちマシフンディスのカリキュラムは、学ぶ者が関わっているプロジェクトの中で諸問題を研究していくことが望まれています。しかし学校の図書館に資料がありませんでした。すでにそれらの本は調べる目的に使われ、本は空っぽの図書室を満たしつつあります。

校長達は大変喜び、もっと本を欲しがっています。いくつかの学校には当初から1冊も本がありませんでした。例えば、チュウマ小学校、ジョウ・スロボ高校、マロゾ高校、I.D.ムヒゼ高校、ランガ高校などがそうです。これらの学校はいまや図書室がありますが、それらの図書室を運営していく知識がありませんでした。その結果本は、整理されず、使われないままになっていました。そこで司書や教師の研修が必要になりました。一方で優秀な図書館と技術を持った学校もありましたので、教師や校長達は、日々の仕事の一部としてそうした図書館を訪ねました。その結果、本は分類され本棚に置かれるようになり、図書館担当教師が、図書館や本の使い方を指導するようになりました。今や本の使用頻度は多くなり、私たちとしても励まされる思いです。生徒達はもはや資料探しに遠方まで行かなくても済むことに感謝しています。

また教師達が次のように言ってきています。授業や授業の準備にもこれらの本が役立っているということです。彼らの授業内容や授業プランの改善のためにもこれらの本が大きく貢献していることについて、あなたがたと私たちに深く感謝していると言っています。　　（訳　野田千香子）

本を送るための梱包作業風景

移動学校図書館

―南アフリカの貧困地域における一つの可能性　その２

ハウテン州教育局（GDE）の場合

ブシ・ドラミニ
（ハウテン州教育省図書館情報サービス部次長）

《目的》

1970年代に、既に病院、学校を対象に公共図書館のサービスが供給されていたように、南アフリカにおいて移動図書館事業自体は決して新しい発想ではありませんでした。しかしながら、ハウテン州の事業がこれまでのものと大きく異なるのは、ハウテン州の移動図書館サービスは、教員や児童の読書や情報習得技術、そして成果重視方法に基づく教授、学習法を促進させるためだけではなく、教員訓練のために重要な役割を果たすことが期待されているからです。

事業の対象となる学校は、基礎的な教材を除いては、図書、図書館そして司書を有していません。従って、ハウテン州のスタッフは、各学校の教員に対して、それぞれの教員が働いている学校の環境に応じた適切な質問を問いかけることによって、図書館サービスを提供しています。

《背景》

1996年に、GDEの図書館サービス部のスタッフがSowetan(南ア最大の発行数をもつ日刊紙)上にベノニにおける移動図書館に関する記事を見つけ、それがTAAAからMEIに寄贈された移動図書館であることが判明しました。それ以降、司書を通して、寄付された図書の中から移動図書館に相応しい図書を選ぶなど、GDEはMEIに様々な専門的、そして技術的支援を供給してきています。

MEIのプロジェクトに関わりながら、GDEはTAAAとコンタクトを取り、図書館車がGDEに直接寄贈されることになりました。また、ELETの使われなくなったままの２台の図書館車もGDEが引き継ぐことになりました。

従って現在は、GDEは取り外し可能な書架が整備された2台の移動図書館バスと、1台のミニバスを所有しています。しかしながら、残念なことに、スポンサー探しのためいくつかの民間企業と交渉しましたが、ミニバスに関しては移動図書館としての認識がされないままでいます。

《現状》

現場地区の図書館調整員と相談、協力しあいながら、GDEはハウテン州の貧困地域において、移動図書館サービスを始めました。パイロットフェーズとして、本年３月から、N1地域において事業が始まっており、クリナン、ブロンコホーストスプリット、バブスフォンテインニにおける7つのファームスクール[1]が選ばれています。これは、地区の調整員による情報技術と成果重視型教育に関するガイダンスサービスの提供による、移動図書館としてではなく、教員に対する再訓練プロジェクトも兼ねています。ショシャングベを含むN4地区、オレンジファームを含むS3地区においても同様なサービスが近いうちに開始される予定です。

《成果》

過去において、あらゆる図書館サービスから疎外されていた教員、児童は、移動図書館によってはじめて図書をはじめとするあらゆる教材に定期的に接することができるようになりました。教員は、図書、資料の利用方法に関する訓練も受けられるようになりましたし、何より選ばれている教材が、フィクション、ノンフィクションを問わず、状況に応じて読者が自ら読解力を向上させ

[1] 白人所有の大農場内に、黒人の農業労働者の師弟用に設置されている学校。私有地内にあり行政当局の管理管轄外にあるため、一般的な施設・教育内容には、概して普通の公立学校より低い。

られるよう、成果重視型教育に相応しいものになっています。

サービスは熱心な支援を得ており、頻繁に利用されています。図書館車が巡回する学校において、本の利用が大幅に増えたことは明らかです。また、このサービスの導入は、いくつかの学校が、自ら図書館を設立する契機ともなっています。

GDEの司書もまた、本プロジェクトにおいて、自らドライバー、教員、そして紙芝居師として多彩な才能を発揮しています。以前は農村部でなど働いたことが無かったGDEの専門スタッフが、移動図書館と共に図書館外に出ることなど、まさに、パラダイムシフトと言えます。地区の担当者も非常に熱心で、彼、彼女達自ら、教員や児童のための図書選択に関わるようになりました。

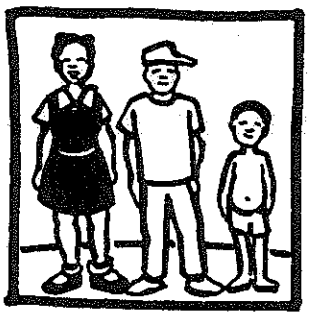
《課題》

現在のところ考えられる課題は以下の通りです。

- ガソリン、維持管理費に関してはGDEから賄えるようになっていますが、ダーバンの港からハウテン州までの図書館車の輸送費を支援してくれるドナーを探す必要があります。
- GDEのスタッフもコード10ライセンス(バスの運転が可能)を取得し、またヨハネスブルグの教員養成カレッジから運転手を再雇用したりしていますが、運転手は更に必要です。
- GDEの司書や、それぞれの地区における図書館調整員に対しては、専門以外の仕事量を軽減する必要があります。
- ハウテン州においては輸入された中古バスを再登録することが非常に困難で、現在も関係部署との交渉中で、始めるべきN4とS3地区でのサービスがスタートできずにいます。
- 学校図書館に相応しい適切な図書を更に拡充する必要があります。
- 巡回を定期的に行うためには、更なるスタッフの時間を割く必要があります。

《結論》

GDEにとって、移動図書館は、教員の訓練と児童の学習に貢献する非常に具体的なプロジェクトです。
確かに、事業を実施・運営するには、適切な計画、十分な資金、そして多くの労力が必要とされ、決して簡単ではありませんが、その教育的効果を考慮すると、明らかに必要なプロジェクトと言えます。



この原稿は先号のものと同じく、南アで行われた識字・読書に関するカンファレンスでの講演の草稿です。カンファレンスの正式なタイトルは Reading for All; Pan- African Strategies - All-Africa Conference on children's reading - 。主催は南アの識字NGOのRead Educational Trust。後援は南ア中央政府教育省、ユネスコ、International Reading Association、世界銀行、British Council、ニュージーランド開発庁。スポンサーは諸々の南ア企業。

（訳と解説　菊川 穣）

続きは次号に掲載の予定です

講演会「アパルトヘイト終焉から５年」開催　（９月26日）

ＴＡＡＡは1992年から現在までに、南アの教育支援のために中古の英語の本を16万冊、移動図書館車を８台送ってきました。その間、1994年には全人種参加の総選挙が行われ、体制は大きく変わりました。５年後の今、南アの現状と未来への展望を語る講演会を開催しました。

この講演会の模様が、Asahi Evening News紙上で報道されました。記事の内容とその訳文、次ページにはヴィヤニさんの当日の講演内容を、併せて紹介します。

【講師紹介】

千葉愁子　1976年生。早稲田大学４年生。TAAAスタッフ。1998年に南アのジョハネスバーグのストリートチルドレンのソシアルワーカーとして８ヶ月働く。日本国内でも福祉活動に従事。

ヴィヤニ・リンゲラ　1975年生。フォートヘア大学、プレトリア大学修士課程修了。イスラエル大学留学。現在、東京農工大学研究生。環境学を研究。

Asahi Evening News 新聞記事訳

2人の学生が、南アフリカで暮らし、働いた経験を講演会で発表した。

早稲田大学の千葉愁子は、今年3月、路上で暮らす子供たちを支援する南アフリカのNGOストリートワイズでの8ヶ月間のインターンを終えた。子供たちが家を出る主な原因は、家庭での暴力や虐待と、親の再婚相手との不和の二つであると彼女は言う。子供たちが路上に求めたものはただ二つ。一つは家よりも安全な場所。路上は危険に満ちあふれているが、家で虐待されるよりはましだと家を出る。そしてもう一つは自由。確かに一見彼らは自由気ままに見える。しかし彼らの人生はもはや彼らの手中にはない。彼らに食べ物や安全を提供してくれる店のオーナーや、場合によればギャングのボスのような彼らを取り囲む大人のものだ。ストリートワイズのデイケアセンターでは、朝９時から毎日6時間子どもを受け入れている。教育的な授業を行うことも試みるが、子供たちの多くは５分以上集中することさえもなかなか困難な状態であったという。

「暴力とアパルトヘイトの長い歴史が幼い子供たちにさえ深い傷を残している」と彼女は言う。例えば25歳の青年のケース。彼はアパルトヘイト後学校に戻ったが、アパルトヘイト中に目撃した暴力をトラウマとして抱え、授業に全く集中できず学校を辞めざるを得なかったという。

彼女は今回の滞在を通じて、海外NGOが出来ることは南アの子供たちが育っていく上で、色々な選択肢を提示することではないかと感じたと言う。「例えば、暴力を振るわれたら相手に暴力で仕返しをする他にどんな手段があるのか、そういったことも小さいけれど一つの選択肢。選ぶのは彼ら自身。しかし選べる選択肢が増えれば、彼らは自分の人生をもっと主体的に生きていけるかもしれない。」

また多くの人々が、カウンセラーといった心理学の専門家に問題を話しながら解決していく欧米社会とは対照的に、南アの人々は自分の問題を人に話すと言う習慣もあまりなかったため、実際助けが必要な状態にある人と話をすることもなかなか難しかったという。

彼女は将来福祉の専門家としてトレーニングを受けて、またソーシャルワーカーとしてストリートチルドレンと働くために南アフリカに戻りたいと言う。現在彼女も所属するTAAAは、1992年に結成され、南アの教育支援のため、既に16万冊に及ぶ英語の本と８台の車を現地に送っている。

またもうひとりの学生ヴヤニ・リンゲラはTAAAの活動の重要性を強調した。彼自身の南アでの子供時代を振り返ると、反アパルトヘイト闘争で多くの子供達は学校に行くのさえままならなかったという。「南アフリカの黒人の低識字率は現在の高い失業率の最大の原因であり、南アに本と移動図書館車を送るTAAAの活動は識字率向上に貢献している。」と彼は話す。彼は現在文部省の支援を受けて、東京農工大学で環境毒性学を学んでいる。しかしこれは単なる個人の留学にとどめず、南アの白人と黒人の間に厳然と横たわる知識の溝を少しでも埋めるための国際交流・国際協力の一環として一役買っていきたいと抱負を語った。　（訳　千葉愁子）

Asahi Evening News記事（1999年10月3日）

Reading the future in South Africa's mean streets

By ROY K. AKAGAWA
Asahi Evening News

Two students recently shared their experiences living and working in South Africa at a meeting sponsored by a Japanese nongovernmental organization (NGO) that has sent English books to the country.

A senior at Tokyo's Waseda University, Shuko Chiba completed in March an eight-month internship with Street-Wise, a South African NGO that helps homeless children.

She said she found that the two main reasons children left their homes to live on the streets were domestic violence and other forms of abuse and an inability to get along with stepparents.

Chiba said the street children with whom she worked had two aims. "They wanted a safer place than home, and even though the streets are also dangerous, some children considered them a better alternative than being abused at home."

They also sought freedom on the streets.

On the surface, they appear to have attained that, but Chiba said this is deceptive.

"They are not really free because they cannot determine for themselves their own path in life," she said.

The street children have to depend on store owners, or in some cases, crime bosses who offer them food and safety. In return, they must do whatever is asked of them.

Her work with Street-Wise revolved around a day-care center in the suburbs of Johannesburg.

Children there are looked after for six hours every day.

While attempts were made to teach simple lessons in the three Rs, she found many of the children lacked the concentration to study for more than five minutes at a time.

Chiba pointed to the violence and long history of oppression under the apartheid system as having left deep scars on even young children.

She also spoke about a 25-year-old who was unable to remain in school even after apartheid had ended, owing to the trauma of having witnessed often ugly violence as a youth that impeded his ability to concentrate on his studies.

Help offered by foreign NGOs to South Africans cannot solve their problems, Chiba stressed.

Ultimately, their lives will not improve until they themselves feel they have to change, she added.

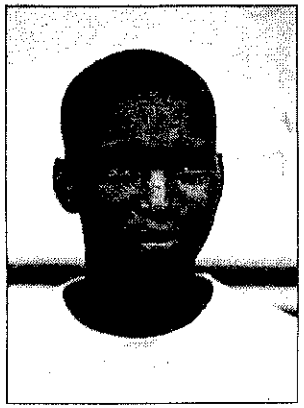
One thing foreign NGOs can do is to provide a greater range of alternatives at each stage of a South African child's development.

This includes other responses when confronted by violence than merely fighting back, she said.

Chiba herself ran into a wall of resistance when she tried to help a teenager win release from wrongful imprisonment.

Authorities responded in a hostile manner to her request for a public defender because they

SEE LITERACY ON PAGE 6



ROY AKAGAWA/ASAHI EVENING NEWS

COURTESY OF SHUKO CHIBA

Vuyani Lingela (above) and Shuko Chiba with a friend at the day-care center in South Africa

Asahi Evening News October 3, 1999

Low literacy tied to unemployment

LITERACY FROM PAGE 5

considered her attempt to help as being beyond what foreigners should do in their country.

Older South Africans with whom she came into contact also tended to be reticent in talking to strangers about their personal psychological problems, making it difficult for Chiba to counsel even those in need. This stood in contrast to the West, where therapy has become extremely prevalent and fashionable.

Chiba said she would like to return someday to South Africa to help street children as a social worker, but only after receiving the necessary training.

Chiba is a staff member of the Together with Africa and Asia Association (TAAA), based in Saitama Prefecture. Formed in April 1992, the group has sent about 160,000 used books in English as well as eight "bookmobiles" (mobile libraries) to South Africa to assist in education efforts.

Vuyani Lingela also touched upon the importance of the work of TAAA. In recounting his own childhood in South Africa, where rioting and turmoil prior to the handover of government in 1994 to the African National Congress made even going to school difficult, he said that many of his friends could not afford to go to school.

A low literacy rate among black South Africans is the major reason for high unemployment, he explained.

While sending books and bookmobiles to South Africa was one way of helping to raise the literacy rate, Lingela considered his present studies at the Tokyo University of Agriculture and Technology as another channel of international exchange and cooperation that would help to bridge the knowledge gap between South African blacks and whites. His studies in environmental toxicology are being sponsored in part by the Education Ministry.

講演

南アの現状と未来

ヴィヤニ・リンゲラ

今日私は、自分の今までの人生や南アの人々のことについてお話しますが、このような機会を「アジア・アフリカと共に歩む会」の方々にもうけて頂いたことを感謝しております。

私は今23才で、人生を感謝したり楽しんだりするには若すぎるかもしれません。しかし不幸なことに、私達は、生まれるやいなや、戦ったり非常に辛い目にあってきたのです。

これから、私の人生や経験、出会った人々について語ることで、南アという国を説明していきたいと思います。

私は、1975年10月12日に、南アのアリワルノースというところで生まれました。

1)田舎での暮らし／ 1976年のかの有名な暴動が起きた時は、私は1才でした。この暴動は、アフリカーンス語を公用語とすることに反抗するものでした。アフリカーンス語は、政府の言葉であり、黒人に対してアパルトヘイトを強いる人々が話す言葉だったので、抑圧の言語と見なされていました。

この時期から1980年まで、私の母は、私をアリスにいる祖父母のところに預けました。アリスはかつてシスカイと言われていた地域です。祖父母は羊、山羊、牛、豚、鶏を飼っていて、全部合わせて350匹以上いました。

ここではいとこと一緒に朝6時半には起きて乳絞りをしたり、放牧したりしました。遊んだり、棒で突っつき合いをしたり、噂話をしたり、自然について語り合ったり、夢を見たり、願い事をしたりして暮らしていました。残念なことに、私の知っている南ア人の中には、このようにして一生を暮らす人々もいます。

2)都会での生活／ 学校に行く時期になると、母は私をアリワルノースに連れ戻しました。都会の環境に慣れるのはとても大変でした。田舎では車は少なくて動物が多かったのですが、都会では車がたくさん走っていて、人々はそれぞれ異なるアクセントや言語で話していました。田舎では、コサ語という1つの言語で話していたのですが、都会では4つの言語で話すようになりました。

3)幼稚園／ 幼稚園に行くようになりましたが、全く好きになれませんでした。幼稚園に行くと、1日中遊んでいる友達から切り離されてしまうからです。早く起きて学校に行く準備をする朝が大嫌いでした。幼稚園では先生から生徒はこっぴどくお仕置きをされたものでした。

4)小学校低学年／ 幼稚園を卒園して、Maletwsai Lower primary schoolで勉強するようになりました。そこでは幼稚園に通わなかった友達と一緒だったので、とても楽しかったです。みんなで一緒に歩いて学校に通ったものです。友達と一緒になれたので学校は好きでしたが、そこでも体罰はありました。当時、教師は棒で生徒の手が血でにじむまで叩いていました。生徒の両親が体罰に対して教師に異議を申し立てたりすると大事になりました。しかし、私が覚えている限り、裁判沙汰になることはありませんでした。残念なことに、何人かは、このような体罰が原因で学校を辞めてしまいました。

再び南アフリカ全土で暴動が起こりました。私が最初に巻き込まれたのは、1985年のことでした。Malcolmess higher secondary Schoolの教師が集団になって歌いながら私たちの小学校にやってきました。先生も生徒も泣き叫んで、窓から飛び降りたり、戸棚の中に入ったりしましたが、やがて集団に加わりました。「uMandela ngubaba wethu」つまり、「マンデラは私たちのお父さん」と唱いました。私の知人のなかには、このような暴動のさなかに命を落してしまう人もいました。

5)低学年の学校を卒業して、Vulamazimuko higher Primary Schoolに通うようになりました。母は田舎の祖父母のところに行かなければならなくなったので、私は友達の家に預けられて、そこで1学期を終えました。2学期になると、母は私を田舎に連れていくことにしました。田舎で1ヶ月以上長く過ごすことになりました。

学校に通わなければならなかったので、田舎での生活は厳しいものがありました。祖父母は他界しており、叔父と叔母が面倒をみてくれました。学期が終わると、私はグラハムスタウンにいる叔父のところに預けられ、そこで小学校の高学年を終了しました。そこでは、放課後になるとおはじきやサッカーをやって遊びました。残念なことに、私の知人の中には、このような遊びに夢中になるあまり、中学に進学しない人もいました。

6)私は宿舎学校に入りました。そこで、一人で生活することを学びました。ここの生徒たちは、様々なバックグランドを持ち、また、南アのあらゆる地域から来ていました。最初のころ

は、私たちは将来に対して楽観的で野心的でした。よく仲間のなかから特定の人物を将来のリーダーに仕立てました。

7)ドラッグ／　私の学校にもドラッグが入ってきました。たばこや大量の飲酒を卒業すると、シンナー、ベンゼン、石油、マリワナ、その他のハードドラッグに移っていきます。ドラッグにのめり込んでいく生徒は、だんだん学業不振になっていきます。このような生徒の多くは、喧嘩をして傷害事件を起こすようになります。残念なことに、私の知っている南ア人の中には、こういった楽しみと学業の折り合いがつけれられなくて、高校に進学できなかった人達がいます。また、潜在能力を発揮できるほど長く生きられなかった人々もいます。

8)暴動／　私の学校も社会から孤立したものではなく、国の改革を目指すいろいろな動きに巻き込まれていきました。私達は暴動を起こして、学校や国を支配している法律を撤廃しようとしたのです。このような暴動は大規模な暴動に発展し、矛先を国を支配しているアパルトヘイトの法律に向けるようになりました。時々学校をさぼっては、自分たちの声を聞いてもらうために、タイヤ、車、バス、校舎、政府のビル、裏切り者などに火をつけました。

このような暴動事件によって、私は刑務所に入れられたことがあります。それは1989年10月10日の暖かい午後のことでした。自分を含め25人の生徒が逮捕され、柵で囲われた監房に入れられました。夕暮れになり気温が下がると、体を寄せ合ってビニール袋で体を覆い合って体温を保ちました。小さな声で自由の歌を歌いました。そこは、とても寒かったです。

9)裁判／　次の日、3人は裁判所への出頭を命じられ、残りの22人は罪を認めて罰金を払わされました。裁判は2日間続きました。精神的苦痛から逃れるために、暴動に参加したことを認めるように勧告されました。その日は10月12日で私の誕生日でした。そのときに被った傷はそれから2，3ヶ月は消えませんでした。

10)高等教育／　色々なことがありましたが、高校を卒業して大学に進学しました。

11)新しい時代／　南ア人の現在の生活は、昔の出来事や経験や知識や無知の結果を表しています。私達は長いこと抑圧され、犠牲になり精神的に奴隷にさせられてきました。国民の多数が直面している課題は、いかに有効に資源を利用して自分の生活やコミュニティーや地域や国を良くしていくかということです。

社会構造は悪化していて、国民のほとんどが非人間的な生活を強いられています。水がなかったり、あったとしても十分でなくまた質が悪かったりします。非衛生的な環境で暮らしていて、排泄設備がなかったり、あっても健康的な生活を送れるほど十分に整っていません。電気のない暮らしをしている人もいます。電気が敷設されていたとしても使う余裕がない人々もいます。このことは、開発を進める活動の妨げになっています。多くの人が失業しています。このため、政府のプログラムに対する依存度が高くなります。また、国民の多くは非識字者で、情報を得る範囲が狭くなっています。南アの今の政府は、このような危機に直面しているのです。

12)私の役割／　見識ある若い南ア人の一人として、今後の状況をきちんと見据えて、いつでも兄弟、姉妹に手をさしのべていくつもりです。日本に来る前は、ポートエリザベス工科専門学校で家畜科学を教えました。これは私の見識を広げるよい機会でした。知識を得たり伝えたり、将来の科学者やリーダーを励ましたりする潜在能力を実感しました。

日本では、国際交流や国際協力に貢献する手始めとして、南アの開発、特に教育に貢献している組織と手をつないでいきたいと思っています。「アジア・アフリカと共に歩む会」は、寄贈者から本を集め南アに送っています。学習する文化を育てるために移動図書館活動を促進していくのが、活動の目的です。

私は可能な限り、International Houseや国連本部でのグループディスカッションに参加しています。日本では、生涯教育のための国際会議に参加しました。そこでは国の発展のための興味深い事柄が話し合われました。私がこのような活動に参加するのは、日本の文部省からチャンスを頂いたものとして、南アの人々に対して責任を果たしたいのと、世界中の人々との親睦を深めるためです。

私はいつも、年輩者や慎重な人々からは隠されていたことは、乳児によって明らかにされると、信じています。

（訳　久我祐子）